

ムゲンニュース

第16号

発行日：2022年12月

発 行：NPO法人ぴあ ルーテル作業センタームゲン

住 所：愛媛県松山市木屋町1丁目9番地2

（伊予銀行本町支店北側を入って30m）

木屋町1丁目9番地4（店舗）

営業時間：8:00～16:00 休日：土・日・祝祭日

TEL・FAX：089-924-8533（代表）

E-mail: mugen@joy.ocn.ne.jp

目次

裂き織りのできるまで……佐野波津子……2

みんなの広場……………4

佐野秀樹、佐野卓志

あとがき……………52

裂き織りのできるまで

佐野波津子

- 1) 着物をリッパーでほどく。



- 2) ほどいた着物を洗濯する。



- 3) 洗濯した着物にアイロンをかける。

- 4) アイロンで伸びた着物を0.8～1cm幅に裂いていく。



5) 機織り機で織る。



「僕とムゲンの関わり」

佐野秀樹

あれは25才のときだったか。昭和と平成の境目あたり。若者の間で「スラムダンク」が流行り始めていた頃、とある学生マンションに僕は連れられて来た。3度目の退院を終えたばかり。一人では外出もおぼつかないバリ

バリの病者の僕を兄貴と波津子さんと数名の有志達が迎えてくれた。おそらく今のメンバーは誰も知らないだろうムゲンの創成期。「足と手の会」という小さな古本屋・・・今や愛媛有数の障害者作業所・「ルーテル作業センタームゲン」との出会いだった。

本は全く売れず、収入源は自販機のタバコだけ。さらに、タバコ担当にお金を盗まれ予算は滞る。家賃を払えずマンションを追い出される羽目に。「足と手の会」は、わずか1年ちょっとで幕を下ろす。そして新しい場所で「ムゲン」と改名し、「居場所」として動き出す。最初の2～3年は、仕事も食事もなく、まさに居場所。お昼頃何となく集まり、しゃべり、アニマックスで「スラムダンク」「地獄少女」最後に「おじゃる丸」を見て、6時過ぎに解散。そんな平穏な時がしばらく続いた。が、ある日ガラッと変わる。炊飯、洗い物、ゴミの分別、レク係、タバコ自販機の管理・・・仕事という仕事が急に僕に降りかかってくる。働いているのは僕だけ。そして事あるごとに波津子さんに怒られた。今思えば、期待されていたのだろう。「鉄は熱いうちに打て」僕は容赦なく打たれ続けた。

しかし、「ルーテル」を名乗るようになって、職員が加わる。メンバーも増え僕の負担は軽くなる。歴代の職員さん達との日々は忘れない。共に汗かき共に笑い、そして共に働いた。ムゲンの歴史は、思い出の歴史でもある。そして裂き織り、ひな人形、家紋ブローチ、苦難が猿・・・ヒット商品を次々と生み出すムゲン。その商品がバザーで売れ、ムゲンは潤っていく。さらに赤い羽根共同募金で車を購入した。ドームも出来、「B型作業所」ムゲンは右肩上がりの成長を続ける。更にソフトボールやバレーボール・・・レクを通じて、他の作業所との交流も始まる。僕自身視野も広がり、バザーやハートフルプラザで「接客」の楽しみを知り、更に自分の可能性をも知りたいと思い始めた。そんなとき、一人の女性職員の言葉が僕の人生を動かす。「秀樹さんは、なぜ働かないの？」・・・パートで一般就労。1日3時間で週3日。そんな働き方もあると。気が付けば50歳。ムゲンに加わって25年。切りもいい。「五十代をどう過ごす」考えた末に僕は、一丁勝負に出ることにした。「ムゲンを辞めよう！」波津子さんに快く送り出された僕は、接客業を中心に仕事を探し始める。ハローワーク、求人誌、そして生活支援センター・・・だが甘くなかった。就労の武器にと、漢検二級を取り、コンピューターも学んだ。それでも仕事は見つからない。「一般就労」にこだわらず、「障害者枠」も視野に入れれば良かったかもしれない。そして僕は気付いた。接客が上手く出来るのは、周りの人の助けがあったから。働きやすい環境を作ってくれていたから。コンビニなどの販売業は、基

本、あらゆる仕事を一人でこなす。さらにシフト制。自分の都合だけで時間帯も決められない事が多い。朝出勤もあれば夜出勤もある。僕の望んだ通りの仕事はとうとう見つからなかった。僕は挫折した。自分の力不足に気付いた僕に、波津子さんはハートフルとロハスへの復帰。さらに水やり、草取りの仕事も勧めてくれた。だが、5年の歳月は脳の老化を生む。病気は治癒していくが、老化は進む。まるでシーソーゲームだ。水やりも草引きも職員の指示がないと、一人では何も出来ない。こんな自分に誇れる仕事、健常者に負けない物はないのだろうか？そんな時に兄が勧めてくれたもの・・・それが「小説」だった。さらに出版化の話も中に入って進めてくれる。僕は取りつかれたように書き続けた。書いてると楽しい。最新作は「白球女子」。生まれて来たキャラクター達。才原コスメ、神原ピカソ、神木純平、夏木涙(このムゲンニュースにも掲載されてます・・・主治医の先生も感想を聞かせて下さり、背中を押してくれる。ちなみに神木は、大好きな神木隆之介から取りました。そして明石出版の神野さん。テレワークで忙しい中、つたない文章に時間を割いてくれている。人に力を借りるのは恥ずべきことではない。出版化されるかどうかは分からないが、今感じてる充実感を与えてくれた皆さん。沢山の人達に僕自身、感謝している。そして人生最後の行く先は、ムゲンの理事長だろうか。まだまだ力不足で、心臓疾患のある兄貴に待ってもらっているカタチだ。さて春になったら、またムゲンが忙しくなりそう。今やってる古着回収に加え、4月からの水やりが待ってる。そのころには、コロナも収束してるだろうか？そして、本にならなくても、小説は書き続けたい。凝りもせず、今度は「白球少女」のスピノフを書き始めた。人間は、一人では何も出来ない。ムゲンも同じ。今までいろんな人の支えがあって、ここまで大きくなったと思う。これからも、それは変わらないだろう。最後に私事。今年中に結婚したいと思ってる。決まった相手はいないが、今年で五十九。そろそろ自分にプレッシャーをかけないと、ズルズルと六十になってしまいそうなので。ムゲンを辞めて8年。老いと戦いながらもそれなりに成長してきた。結婚生活に不安はあるものの毎年がラストチャンスだ。現在のムゲンとの関りはメンバーでもなければ部外者でもない。相変わらず波津子さんには怒られるが、「つかず離れず」といった距離感が心地いい。この先何年、現役でいられるか分からないが、このまま「負け組」で終わるつもりはない。ムゲンにお世話になりながら、もうワンランクアップ。結婚して、「終わり良ければ総て良し」という人生にしたい。さだまさしではないが「お前のおかげでいい人生だった」心からそう言える最高のお嫁さんを見つけて・・・

ムゲンの仕事と職員さん

ムゲンとの関わりは、職員さんを抜きには語れません。元々ムゲンに職員さんはおらず、ほとんどの仕事を僕が受け持っていました。洗い物、タバコ自販機の管理、レクレーション係、ゴミの分別、そしてバザー・・・初めから完璧な仕事出来る訳もなく、どれだけ波津子さんに怒られ鍛えられたことか。そこへ救世主の如く現れた職員さん。一人目が誰か、記憶定かではありませんが、一番インパクトが強かったのが、波津子さんの妹さんのS浪さんです。優しさはもちろん気持ちの強さ、芯の強さも持ち合わせていた方です。驚かされたのは、始まったばかりのハートフルプラザ。未だ本館で細々とやってた頃、よくコンビを組ませていただきましたが、「この服はお客様にピッタリです。買うべきです！」お客様に食い下がる情熱的な接客は、脳裏に焼き付いています。ハートフルへ出す商品も沢山作っておられました。ハートフルと言えばW部さんも忘れられません。とにかく真面目な方で、革靴を忘れた時は、その1回だけのために紳士服売り場まで買いに行っていました。軽い強迫観念を持ってて、締めが終わって帰る途中、「何か忘れたかも？」と何度も売り場まで戻って行きました。でも楽しかった。僕がムゲンを辞める直前に現れて、「また秀樹さんと仕事がしたいので、メンバーとして復帰したい」と言ってくれた時は嬉しかったですね。その後、僕が復帰した時、声をかけたのですが実現せず。タイミングが悪かったですね。さて、ここでパンドラの箱を開けましょう。S野さん。大物の職員さんで、卓志くんも波津子さんも「この人に次代のムゲンを任せよう」そう言ってました。教会の牧師を兼ねていたのですが、全てを放り出して若い女と姿を消しました。僕も含めてあまり触れたくない人ですが、不思議に世話になった思い出の方が強いです。あと、女性ではK村さん。クォーターで絶世の美人さん。これもハートフル絡みですが、出勤してきたメンバーの目を間近で見て体調の良し悪しを見極めていました。あんまり近いのでキスしようかな？と思ったときも。明るい人でもありましたね～あとは、僕を「ヒデジ～」と呼んで、よく相談に乗ってくれたY子ちゃん、新しく作業所を立ち上げ僕を誘ってくれたK木さん(その節は)、矢沢永吉ファンで、いつも自信満々なA戸さん。憧れました。等々。そして、今の四人。まずは、一緒に回収をやってる鍋焼うどんさん。判断力、洞察力、リーダーシップを持ち合わせた人で、僕と20才も離れているのに、不思議と気が合います。車の運転も上手く、この人のおかげで回収作業が楽しいです。そのうどんさんの直属の上司、すすき野さん。クイーンが好きで、よくカーステレオから流れています。面倒見のいいナイスガイです。内職の最前線

で日々、戦っています。そして、「スーパー事務員」の山奥さん。彼がいないとムゲンには回りません。ムゲンの勤続年数は歴代職員ではNO.1。困っている時に素早く現れ、救ってくれます。少々、コミュニケーションは苦手なようですが、語り口がソフトで、安心感があります。最後にご紹介するのは、ハートフルとロハス担当松竹さん。姉御肌でとにかく明るい方です。その明るさを活かした接客は一級品。それもそのはず、もともと高島屋の職員さんで、いつも参考にさせてもらってます・・・と、いろんな職員さんに良くしてもらいましたが、チームワーク溢れる今の4人は最強だと思います。運の悪さか仲のいい人に限って辞めていくので、この4人はいつまでも残ってほしいです。これからもよろしくお願いします。

ムゲンの一日

午前7時。いの一番に出勤してくる村中村さん。インタビューしてみた。「そうですね。朝眠いですけど、今日も仕事頑張らなきゃ、気合で起きます」「朝ごはん食べる暇がないのでは?」「いえ。どんなに遅くなってもコーンフレークはちゃんと食べて来ます。」そう言ってる間に、三々五々メンバー達がムゲンの扉を開けてやって来る。「おはようございます!」彼女たちがまずすることは、「手洗い」そして「検温」。コロナ禍のルーティーンだ。彼女たちの仕事は内職。ホテルに置いてるアメニティセット。歯ブラシ、髭剃り、綿棒などが袋に入ってるあれだ。それらを袋に詰める人、その準備をする人、袋を閉じる人(ガン止め)、完成したアメニティを数えながら箱に詰める人、それを職員さんが納品する。ここまでが一工程だ。皆、それぞれにノルマがあり、息を抜けない。しばらくして送迎車に乗った一行がムゲンに着く。遠くから通うメンバーたち。さらに9時。仲のいい久ちゃん出勤。同じタイミングで筆者もこの時間帯に来る。僕の仕事は古着回収だ。スーパーなどに設置してある「古着ボックス」。そこに入ってる古着入りのビニール袋を回収する。僕も昔は内職作業だったが、今はガッツリ回収だ。鍋焼きうどんさんが運転する車で各スーパーを廻る。単純作業だが古着がたっぷり入った袋を両手いっぱい運ぶハードな作業だ。でも、負荷付きのウォーキングのようなもので足腰が弱り始めた自分には天職だと思ってる。2時間程で帰って来る。帰ったら手を洗って、段ボール整理に入る。内職で派生した段ボールを潰してまとめる。それが終わったら、さあ昼食だ! 理事長の兄貴が朝から厨房に立ってる。「今日の料理」は何か? 兄の腕はちょっとしたもので、メンバーからの評価も高い。特にとんかつは、「外はサクサク、中はジューシー」な絶品だ。「ごちそうさまでした!」満足気な顔で嶋大輔さんが仕事に戻っていく。食事は男女別々。換気、食後のアルコール消毒も万全だ。食べ終わった僕はここで仕事終了。内

職組はまだ続く。1時半。「お疲れ様ー」メンバーは解散。4時には職員さんも仕事を終える。

時は5月。温度計が20℃を超える。長いGWが終わり、僕のもう一つの仕事、「水やり」が始まった。依頼された企業へ出向き、乾いた草や木に水をやる。メンバーは「嶋大輔さん」、「コーヒーは加糖さん」、職員の「鍋焼うどんさん」そして僕の四人。手分けして作業開始。青々とした草木が水を欲してる。「ほらぁ、しっかり飲むんだよ」1時間たっぷり水をまくと、途中休憩。「前立腺肥大組」はトイレへ。そして後半戦。一気に仕上げる。ホースを巻き終わったら作業終了。「やったー明日はお休みだー」そして別バージョンの野外作業。月に一度の「草引き」。すすき野さんの指示で6～7人が大移動。雑草を引いて廻る。簡単な作業だが、結構体に来る。停めてある車を傷つけないように気を着けながら、また大移動。たっぷり3時間。帰りの車は疲労で誰も無口。ムゲンに帰ると波津子さん手製の冷や汁で生き返る。「お疲れ様～」

一部、演出も入れましたが、こんな感じでやっています。最高のメンバーと楽しく過ごす毎日。ルーテル作業センタームゲン。創立30年が過ぎようとしています。



「白球女子」～障害者バッテリー

佐野秀樹

2025年、NPB(日本プロ野球機構)は、「ドラフト指名における性別＆年齢枠の撤廃」を発表。同年。四国松山。

「コスメ、あんたまた夏木先輩描いてるの？」コスメと里帆、二人だけの美術室。放課後の1コマ。「だって格好いいんだもん。ウチの野球部一人で背負っているのよ。外角球だけでノーヒットするなんて・・・人呼んで、”アウトローの女王”。プロに行くのかな～先輩。」「でも、なんで外角だけ？」「内角なんて必要ないのよ。あの直球とスライダーがあれば」「そっかー。

ところでコスメ、今日診察日じゃなかった？」「あっ行かなきゃ」・・・(1分後)「コスメ、どーした？」「ハアハア忘れ物無かったかな？えーと。財布持った、保険証持った、診察券、おくすり手帳。えーと。マスク、ハンカチ、財布、保険証、診察券・・・あるよね、あるよね」「大丈夫、行っといで」「行ってきまーす」才原コスメ。16才。軽度の強迫神経症を持つ、どこにでもあるような少女の壮大なストーリーが、この夏始まる。

「ハアハア、間に合った。すいません、才原です。」「お待ちください。」「ふー。あれ？夏木先輩？」「あっ、あなたは。1年の才原さん？」「えっ？私の事ご存じなんですか」

「うん。文化祭で見たわ。私の絵を描いてくれて。とっても上手だし。」(よし！美術部で良かった)「でも、ここは精神科・・・」「私も神経症なの。内角球が投げられなくて。昔のトラウマでね」コスメは脳天をハンマーで殴られた気がした。憧れの先輩が障害者。しかも、内角球を投げないんじゃないでして投げられない。トラウマって何？訳を聞きたい、でも聞けない。混乱するコスメ。あからさまにショックを受けてる後輩を見かねた彼女は口を開いた。「聞いてくれる？私の過去。」「ハイ」「小学生の時、リトルリーグ世界大会があつてね。プエルトリコ代表のエディ選手に、彼の頭にデッドボールを・・・それで、」(先輩、その先は言わないで)「彼は亡くなったわ。それ以来、内角球が怖くて投げられなくなって」「アウトローの女王」・・・絶対的だった涙(るい)へのリスペクトは音を立てて崩れ去った。「クスリでは治らない。自分で乗り越えなさいって先生はおっしゃるけど」・・・「殺人者よ、私」そう言って彼女は名前と同じ、美しい滴(しずく)をこぼした。夏木涙(るい)。学校中のアイドルの残酷なエピソードを知ってしまったコスメ。「先輩、これから時間ありますか？」自分一人では受け止められない。コスメが頼った先は・・・「ルーテル作業センタームゲン」。「あら、いらっしゃいコスメちゃん。お客さん？」「春子さん。学校の先輩、夏木涙さんです」「涙といます。ここは？」・・・「そう、それは辛かったわね、涙ちゃん。でも立ち直るためにあなたがすべき努力があるわ。コスメちゃんが力になれるかもよ」・・・(翌日)「才原コスメです。よろしくお願いします。」急転直下の野球部入り。そして先輩キャッチャー海野を押しわけプルペンへ。「先輩、ボールを受けさせてください」「大丈夫？コスメちゃん」涙、五分の力で。しかし惚れ惚れする美しいボールの軌道。そして生まれて初めて着けたミットは、微動だにせず。「ナイスキャッチ！あなた経験あるのね」「いえ。いつも美術室から遠目に見てるので、なんとなく。」「それにしても。じゃあ変化球行くわよ」滑るように沈む白球。「おっと、スライダー」「すごいわ、貴方」照れながら憧れの先輩の球を受ける。そして8球目。「ここに投げてくださ

い」「イ、インコース？」キレイのいいストレートが心地よくコスメのミットに収まる。(やっぱり。打者がいなければ投げられるんだ)「海野さん、すみません。バッターボックスに立ってもらえますか？」「あ、ああ」そして内角高めに構えるコスメ。「先輩、ここです」しかし途端に制球を乱す涙。2球、3球。外角に大きく外れる。「ありがとうございました。」「やっぱりダメね。ごめんなさい」「いえ」

翌日。剣道部。「防具を貸してくれたと？」「はい。ちゃんとお返しします。いつになるかは・・・」「わかったよ。ほれ、持って行きな」「ありがとうございます」そしてグラウンドへ。「遅くなりました」「ちょっと、コスメちゃん・・・」(ほ～面白いなあの子)身を乗り出す監督の夜遊(よあそび)。「さあ、投げてください先輩」全身、防具を身にまとったコスメがボックスに立つ。「大丈夫ですから、思い切りぶつけてください。」「うん」小さくうなずいて初球。しかしボールは外角へ。「さあ、続けて！」コスメの眼は真剣(マジ)だ。しかし、ぶつけるどころか1球たりとも内角へは来ない・・・「ハアハア」100球目。外角へ。「ありがとうございました。」

そして、10日が過ぎた。1年C組。教室の里帆とコスメ。「頑張ってるね、コスメ。でも、来ないね、内角に。」「うん。でもね、里帆。私、見えるの」「何が？」「ほんの何ミリずつか、内角に近づいてるの。先輩のボール」「えっ？」「それが楽しくて。いつ私の防具に当たるんだろうって。そしてね、一球ごとに先輩との距離が縮まってるの」「そうなんだ」「あっ、練習の時間だ、行かなくちゃ」「忘れ物は？」「無い！多分」「コスメ・・・」

セミの声が夏の到来を教える。7月。コスメが入部して1ヶ月。ついにその時が・・・「痛っ」真っ黒に汚れた防具。その胴に、涙のボールが当たる。「ゴメン、大丈夫？コスメ」初めて呼び捨てにされたのも嬉しかったが、それ以上に。「先輩！やりましたね！」3001球目。涙の145キロが内角へ。「先輩、シュート投げられますか」嬉しくて仕方がないコスメ。切れ味鋭く内角へえぐるようなシュート。あの日。エディとの対戦以来、八年間封印していた極上の一球が、再び胴を直撃。「やったなー」喜びがはじける。マウンドの涙に飛びつくコスメ。「ありがとう、コスメ」二人に、もう怖いものは無かった。三日後の練習試合でノーヒッターを決める涙とコスメのバッテリー。それ以上に三個のデッドボールがコスメには嬉しかった。

さあ、甲子園へ行こう！7月7日。七夕祭りの到来と共に開幕した県予選。58チームが競う中、シード校はこの四校。お馴染み「夏将軍」こと松山商業、毎年のように有望選手をプロへ排出する済美、さらに新興勢力ながら萩原、楠木を中心に重量打線を誇る「候補」の一角・松山桐蔭。そして夏春連続甲子園出場。絶対的エース夏木が引っ張る群青(ぐんじょう)高

校・・・夏の球児たち。コスメもその一人だ。背番号「15」の真新しいユニフォームに袖を通す。「どう？お母さん」ご満悦の娘の姿に母親も笑顔だ。「まさか、あんたが野球とはね。」「プロにスカウトされたりしての～」「いいこと言うねーじいちゃん」「ないない。それより、コスメのせいで負けたら、お母さん申し訳なくて外を歩けんよ」「むー」

7月10日。坊っちゃんスタジアム。満を持して群青登場。相手は古豪・今西だ。夏木&海野のバッテリー。コスメはベンチスタートだ。海野のキャッチング、スローイング、ストップ・・・目を凝らして勉強中。7回。出番が来た。海野のところで代打。「コスメーガンバレー」里帆の応援むなしく三球三振。「アチャー」公式戦初ヒットは生まれず。8回からはマスクをかぶる。7回までは外角一辺倒の涙。やはり、海野相手では内角は投げられない。8回からガラリと変わり、攻めの配球。内角の直球、シュートで2イニングを翻弄する。4－0。初戦を圧倒。強い。群青は横綱相撲で勝ち進んでいく。帝京大五、星稜、新居浜西高そして済美を撃破。決勝進出！そして正捕手の座を掴んだコスメ。後に伝説となる松山桐蔭との決勝。サイレンがその始まりを告げる。

「しまって行きましょ～」コスメの掛け声が夏の夜空を突き抜ける。そして・・・「ちよっとごめんなさい。えーと。C－128。ここ、是澤さん、ここ。オガチはその隣ね。で、寺井くんがそこ。辻井さんが一つ上ね・・・みんな座って。」「春子さん！」コスメと涙に最強の応援団。ムゲンメンバー勢ぞろいだ。1回表。背中を押された涙は絶好調。最速147キロのストレートに、キレッキレのシュート、スライダー。桐蔭の強力打線を三者凡退に。桐蔭先発の諸星も丁寧に打たせて取るピッチングで5回まで無風状態。6回、桐蔭監督・山辺が仕掛ける。「バッター嶺井に代わってフレディ！」「えっ？」マウンド上の涙の表情が一変する。「エディ君？」涙の変化にいち早く気付いたコスメがマウンドへ。「どうしました？先輩」「エディ君。エディ君が」震える涙。三塁側ベンチの山辺がニヤリ。「さ～て。面白なるな」「先輩、落ち着いて。エディ君じゃないですよ」コスメの励ましはしかし無力だった。フレディへの初球はコスメの構えた内角低めを大きく外れる。二球目も三球目も。そして涙は初めてのランナーを許す。「安い買い物やったで」そしてスタンドに向かって合図を送る。「人殺し！人殺し！」突然の大合唱。さらに「障害者！障害者！」涙を潰しにかかる。フレディは、エディの双子の弟だ。8年の歳月が流れたとしても、エディとはうり二つだ。山辺が特待生として桐蔭に招いた。この試合のためだけに。8年前の「事件」を、山辺は、SNSで取得していた。明らかに動揺する涙。次打者・五月雨にも。二者連続フォアボール。「そこまでして勝ちたいか！山辺」「あ

んにゃろー」立ち上がろうとするコスメを制した主審・庭先。「タイム！」。三塁側スタンドに向かって小走りすると「退場！」ざわつくスタンド。「君たちにこの素晴らしい試合を見る資格はない！さっさと帰りなさい」渋々と球場を後にする桐蔭応援団。さらに、「あなたもだ、山辺さん」「何だと？」「生徒たちに何という事をさせるんですか。あなたは野球人ではない。退席願います」「くっ。たかが審判のくせに。役員会で問題にするからな」「お好きに」そしてマウンドへ。「大丈夫かい？」「ハ、ハイ」「8年前の事件から、よく立ち直ったね。もう一息だ」「ありがとうございます。あの、庭先さんですよね」「ああ」・・・8年前。イタリア・トリノ。「大丈夫か？！エディ君。担架、担架を。救急車を、早く！」倒れたまま微動だにしないエディ。そして、「夏木くん、危険球退場だ。辛いだろうが、君なら立ち直れる。君を救える仲間がきっと現れる。ガンバレ」・・・「いい仲間が現れたね。今の君なら大丈夫だ」「庭先さん」8年ぶりの再会が涙を救う。二者連続三振でツーアウト。だが、桐蔭も負けてない。「ここからは私が指揮を執る」葛城部長が4番・荻原に指示を伝える。「初球は必ず内角ストレートで来る。狙っていけ。」その初球。指示通りの内角ストレート。少し上ずった145キロを荻原が捉える。「やられた！」左中間真っ二つ。二点タイムリーツーベース。塁上でガッツポーズの荻原。まだまだリードに課題を残すコスメ。マウンドへ走り寄る。「すみません。私のせいです。でも、直球は走ってます。切り替えていきましょう」五番・楠木をセカンドゴロに打ち取り、ドラマの詰まった長い6回表が終わる。松山桐蔭、2点を先制。

「コン」。しかしその裏、コスメのスライダースが群青に希望の灯をともし。ナイスゲーム。だが、まだまだ結末は見えない。7回、桐蔭。ワンアウトから、またも荻原。涙のスライダーを右中間へ運ぶ三塁打。続く打者は楠木。99%スライダースの局面。涙にサインを送るコスメ。二人はフォークボールを選択。バント成功率10%の球。涙のモーションに合わせて荻原がスタート。（もらった）落差満点のフォークにスライダース失敗。しかし、ホームベース上で跳ねたボールをコスメがまさかの後逸「あっ」。桐蔭に大きな大きな1点が入る。炎天下、熱中症ギリギリの中でプレーする選手たち。特に涙のダメージは大きい。決定的な1点を失ったうえ投球数は120球を超え、疲弊（ひへい）していた。「なんとかしなきゃ」だがその一方で、「野球って楽しい」躍動するコスメはいつしか観客を味方に入れる。ミスをしてもしやをしても、笑顔を絶やさないそんなコスメに称賛の拍手が鳴りやまなかった。八回。そのコスメにチャンスで打席が回る。ツーアウト1塁、3塁。「いいか、コスメ。繋ごうなんて思うな。ホームランを打つつもりで思い切り振ってこい」「ハイ。」そうは言ってもここまでの成績は15打数2安打。打率にし

て1割3分3厘。今日もスクイズを決めた後は2三振だ。それに比べて次打者・1番の天下は3安打と絶好調。普通なら「繋ごう」と思うのが当たり前。右耳に入ってきた夜遊の言葉は左耳から抜けていく。相手外野手も当然のように前進守備。バットを短く握り、「天下さんに繋ぐんだ！」しかし諸星の初球を、気付いた時には思い切り振りぬいていた。「カーン」心地いい金属音と初めての感触。「いいかも～」酔いしれるコスメ。「こらー！走らんか」夜遊の一喝で慌てて走り出す。(打球はどこ？)外野手は一步も動かず天を仰いでいる。そしてスタンドからは大歓声「えっ？」夜遊のマンツーマン指導。そして毎日、振り込んだ。努力はウソをつかない。外野席で弾む白球。「ウオッシャー」吠えたコスメ。里帆が、春子が、母・陽子が拳を握る。「コスメー」・・・9回もツーアウト。マウンドの涙とコスメ。「自分を信じて、私のミットに投げ込んでください。あなたは日本一の投手、夏木涙です」最後のバッターは、フレディ。ホームベースに覆いかぶさるように構えるが、もう小細工に心乱れる涙ではなかった。内角ストレート3球。コスメのミットは微動だにしない。内角を克服し、味方に付けた涙。「ゲームセット！」庭先がコールする。ファイナルスコア「4-3」群青、三期連続甲子園！

翌日。「こんにちは一」浴衣姿でムゲンに凱旋報告の二人。メンバー皆、昨日の余韻が残っている。だが、春子の言葉は意外だった。「あんたら何しに来たん？ここは障害者作業所。健常者の来る所じゃないよ。」「・・・」「あんたら出入り禁止じゃけん。もう来るんじゃないよ」それだけ言ってトイレに駆け込む春子。そして一人、大粒の涙。(ごめん、ごめんよ。涙ちゃん、コスメちゃん・・・あなたたちは、これから大きな舞台で闘っていくの。もう、うちなんかに頼っちゃダメ。)春子の言葉を理解した二人は、一礼してムゲンを去る。

高野連。松山桐蔭の決勝での行為に処分が出た。1年間の対外試合禁止。また、山辺監督の退任も決まった。罪の無い選手たちも連帯責任。これが高野連だ。甲子園出場を逃し、卒業する荻原ら三年生。しかし、1年生、2年生は試合に出られない一年を過ごす。群青に転校してくる選手たち。その中にはフレディもいた。夜遊はフレディの身体能力を買ってた。コスメと同じく徹底したマンツーマン指導。短期間で急成長のフレディは、クリーンアップの一角に。そして元正捕手の海野も5番ライトとして育成中。さらに伸び盛りのコスメ。涙は盤石、いや内角イップスを克服し、さらにパワーアップ。群青、全国への準備は整った。

「甲子園には魔物がいる。そして怪物も」甲子園に集う四人の怪物。一人は夏木涙。そして札幌名水高のスピードスター神原ピカソ。100メートル1

0秒8。加えて高校通算28本塁打と鉄壁の外野守備。三人目は女子最速の152キロを誇る大成高・江夏唯(ゆい)。付いた呼び名は「剛球姫」。そして四人目。アルプススタンド最上段から観戦する史上最年少ドラフト候補・神木純平。10才。博多リトルに所属する天才肌のセカンドだ。「可愛い～」女子高生に握手をせがまれ頬を染める神木。小学生プロ野球選手は誕生するのか？それぞれの思いを乗せて「第107回全国高校野球選手権大会」開幕。

「・・・女の子でも甲子園で輝ける。精一杯のプレーを全国の方に見せれるように頑張ることを誓います。名水高校神原ピカソ」名水高・神原キャプテンの選手宣誓が甲子園に響く。「へ～これが甲子園か。すごいなあ」興奮冷めやらぬコスメ。その肩をポンポンと叩く涙。そしてピカソ。三人の少女が聖地甲子園で伝説を作る。開幕戦、名水高校VS群青高校スタート。「カキーン。」「行った———！」選手宣誓から45分。注目の一戦は、ピカソの先頭打者ホームランで幕を開けた。「すごい」・・・観戦中の神木も啞然。颯爽(さっそう)とダイヤモンドを周るまさにスーパースター・・・しかし、「ドンマイどんまい。切り替えていきましょう」一瞬で負の空気を一変させるコスメ。彼女もまたスターへの扉を開けようとしていた。立ち直った涙は、二番以降を三者三振。失いかけた流れを引き戻す。しかし、ピカソが今度は守備で魅せる。大下のセンター前に落ちようかという当たりをスライディングキャッチ。スカウトが身を乗り出す。さらに代名詞の走塁。キャッチャーを始めて日が浅いコスメに、10秒8を封じるのは至難の業だ。二盗三盗、そしてスクイズで悠々と帰って来るピカソ。一人舞台だ。5回を終わって、5-0。名水の圧勝と思われた6回。群青の新4番・フレディの一振りが3点を奪い返す。スタンドインする打球は、ピカソでさえ無力だ。5-3。しかし、なおも足で点差を広げにかかるピカソ。二塁盗塁。だが、コスメの送球が際どいタイミングを作る。「最高の練習台だな」夜遊がほくそ笑む。その鉄砲肩は夜遊も認める天賦(てんぷ)の才能だ。後はコントロール。「ピカソの足VSコスメの肩」野球好きにはたまらない対決だ。コスメを挑発するかのよう、今度は三塁へ。サード的場がタッチ。「んん・・・」一瞬間があって腕を左右に広げる塁審。「ふ～危ない」二人だけが楽しめるギリギリの攻防。そして浅いレフトフライで楽々生還。6-3。「う～んムカつく」8回。そのコスメがスライダーをレフト席へ持って行き、2点差。1イニングごと、1球ごとに進化していくコスメ。「この16才を指名するべきか？」スカウトの嬉しい悩みは、疑問から確信へと昇華していく。そして9回表。名水は、抑えの水元をマウンドに送る。防御率1.26の守護神だ。だがおそるべき群青の粘り。1点を返してなおも二死満塁。ここで今日

ノーヒットの大下。初球をセンターへと打ち上げる。「マジか」「オーライ」ピカソが捕球体制に入る。群青、万事休す。しかし甲子園の魔物がピカソに取りつく。このフライを名手ピカソがまさかの落球。騒然とする甲子園。二者が帰り群青が逆転！9回裏二死。今度は追う立場の名水。鬼気迫るピッチングを続ける涙からピカソが三遊間へ。勝負は終わらない。「二塁へ」大き目のリードを取るピカソ。「初球来ます。1球ウエストしてください」涙にサインを送るコスメ。涙が足を上げた瞬間、ピカソが最高のスタートを切る。「負けるもんか」コスメのキャノン砲がセカンド大下のグラブに吸い込まれる。「それだよ！」「アウト！アウト」そして「ゲームセット！」スーパースター・ピカソが初戦で散る・・・しかし、新しいヒロインの誕生に沸く甲子園だった。コスメはこの日を境にファンやマスコミに囲まれる。「一番星コスメ」「ニューヒロイン聖地に現る」各スポーツ紙が書き立てる。サイン、握手は当たり前。追っかけも現れコスメの行くところ人・人・人・・・そして涙とコスメ擁する群青は勢いそのままにベスト8の快進撃。準々決勝の相手、「大成高VSLP学園」の視察。内野スタンドに陣取る。「おい、もう始まってぞ。」群青ナインが目にしたのはマウンド上の圧倒的存在感。大成高の「剛球姫」江夏の快投乱麻だった。3回を終わって3-0。LP打線は沈黙。9人連続三振に凍りつくコスメたち。152キロのストレートは速くて、なお重い。一球たりともフェアゾーンに飛ばないまさに「ザ・剛速球」だった。「ゲームセット！」20奪三振のノーヒット。余力を残した涼しい顔でマウンドから降りて来る、そのスタミナも脅威だ。江夏唯(ゆい)。出来るなら避けて通りたい、今ドラフトの目玉との対戦が決まった。そして、その日は来た。

「ねえ、神木クンでしょ」江夏とコスメのバトルを心待ちにしてた純平は、背後からの声にワンテンポ遅れて振り向いた。「ピカソさん」スーパースター同士の初対面。「隣、空いてる？」「札幌に帰ったんじゃない？」「うん、帰ったんだけど。この対決が生で見たくて戻って来ちゃった。君はどっちが勝つと思う？」学校の勉強よりはるかに難しい質問を、しかも憧れの存在から投げかけられた。固まる純平。「じゃあ、質問を変えるわ。コスメと唯、どっちがタイプ？」さらに難問。なんなんだこの人は。10才に聞くことか？赤面する純平に「冗談よジョーダン。君の野球観を知りたくてね。一緒に見ましょう。」10才と18才。年の差ツーショット。解説はこの二人にお任せしよう。

先攻は群青。5万観衆に挨拶代わりに150キロがうなりを上げる。剛球姫・江夏唯参上。「唯さん、今日も球走ってますね〜。」二者連続三振で三番・群青の主役が登場。コスメだ。「さあ！どうするコスメ」ピカソの声がオ

クターブ上がる。「思い切り行くだけ」右バッターボックスに入ると観衆が一斉に立ち上がる。「ん?」「コ・ス・メ」「コ・ス・メ」甲子園に沸き上がるコスメ・コール。「悪役上等!」ギアを上げる唯。初球、153キロ。自己最速!空振り。「速い。こんな速い球見たことない。涙さんより…」キレは涙が上だが、圧倒的スピード。フルスイングで対応するが当たらない。「コスメさんが」(神木)、「三球三振」(ピカソ)。とんでもない怪物に遭遇(そうぐう)したコスメと五万観衆、そしてスカウト達。現時点で、ピカソとコスメを超える評価だ…圧巻の11人切り。「打ってみろ」と言わんばかりの全球ストレート。そしてコスメの二打席目。「さあ、見せてくださいコスメさん」祈る神木。初球ファール。「当たった。」二球目も。「粘るしかない。せめて」…10球ファールが続いたあと、「安易に変化球放ると持って行かれるわよ」ピカソの予言が当たる。ストレート待ちの変化球対応。11球目のカーブに体が反応。打球はコスメファンのひしめくレフトスタンドで跳ねる。「やった、やったー」神木が普通の小学生に戻る。甲子園4発目。これがコスメ。群青1点を先制。一方の大成高は唯のワンマンチーム。唯が打たれると苦しい。「コスメに続け!」フレディが、海野がファウル攻め…5回を終えて唯の投球数は120球を数える。汗を拭う唯。一方、百戦錬磨の涙は、マイペース投球。しかし6回、唯に一発を食らう。1-1。「孤軍奮闘ね。でも終盤戦は一見の価値あるわよ」7回。コスメの大きな打球がフェンス直前で失速。「レフトフライかあ」「あれ?でも今のストレートだったですよ」掲示板に映る「148キロ」。初めて150キロを下回る。9回。投球数が170球を超え、さすがに疲れが見える唯。「ビッグイニングの予感よ」不敵に笑うピカソ。大下がヒット。三井が送ってコスメの4打席目。「さあ!来たわよ」獲物を狙うような目で唯をにらみつけるコスメ。その初球。「レフトスタンド!じゃなくて?」火の出るようなライナーが一二塁間を抜ける。ライトがファンブルする間に二塁ランナーが生還。2-1。再びリード。「すごいなあコスメは。ここでホームラン狙いじゃなくてタイムリーに徹するなんて。戻って来た甲斐があったよ」感心しきりのピカソ。そして四番フレディが申告敬遠される中、ネクストの「背番号9」が静かに震える。「海野さん」。コスメに正捕手の座を奪われ、ライト5番で再デビュー。ここまで甲子園でノーヒットだが、今日の主役はコスメじゃなかった。初球145キロ。球速の落ちた甘いストレート。一振。そして打球はレフト最上段へ。…「海野和虎・男泣き」

「しまっていきましょうー」4-1。3点リードの最終回。このまま終わると誰もが疑わなかった。(今日は特別なんだ。絶対勝たないといけないんだ。海野さんのためにも)コスメはこの試合の大切さを分かっていた。しかし連

投の疲れは涙にも忍び寄る。制球定まらない中、ツーアウトまでこぎつけたが満塁。一打逆転サヨナラの場合で最も警戒しなくてはならない打者。江夏唯が打席に入る。一球、二球と外れ、バッティング・カウント。だが、甘目に來たストレートを打ち損じる。「ちっ」後方に飛んだ大きなファール・・・「！」この打球を物凄い勢いで捕りに行くコスメ。「無理するな」「絶対、勝つ！」飛び込み、キャッチしたが勢い余ってバックネットフェンスに思い切り激突！「コスメ！」ボールは落としてない。だが・・・倒れたままピクリとも動かないコスメ。ピカソが、神木が、誰もがが立ち上がり、高校球界の至宝の安否を確かめる。「担架！救急車を呼べ！早く」救急車で搬送される甲子園のスター。「行くわよ、純平」「どこへ？」「ここからなら生田病院。コスメを追うわよ」衝撃的映像は日本中を駆け巡り、春子が、里帆が、母・陽子が向かう。兵庫・生田病院へ。

(ここはどこ？私は死んだの？誰？お父さん！お父さん、逢いたかった。)
(コスメ、こっちへ来ては駄目だ。みんなの待ってるところへお帰り。がんばれよ。お父さんは、ここから見てるから。それじゃあな)(お父さん、お父さ～ん)・・・「コスメ！コスメ！」「んん・・・眩しい」「気が付いたか、コスメ」「良かった、よかった～コスメ」「ここは。病院？」「気が付いたかい、才原くん。院長の生田だ。気を失ってたんだよ。脳は異常無かった。ただ・・・」「痛っ！」「うん。腕、足、背中、わき腹。体中ボキボキだ」「骨折。試合は？明日の準決勝は？」「無理だな。全治6か月。その後リハビリに6か月。野球が出来るようになるまで1年かかる」「え～」「たっぷり時間があるんだから、何でも出来るよ。勉強でもすれば～？」「むー」「夏休みの間は私いるから」「里帆～持つべきものは親友だねえ」「とりあえず明日頑張るから。テレビで応援してて」「ハイ。痛っ、涙さん、頑張ってください」「それじゃあ、私らはこれで」「えっ？帰っちゃうの？」「無事だと分かったんでね。仕事もあるし。里帆ちゃんいるし」「お大事にね～」「この、薄情者たちが！」「皆、帰っちゃったね」里帆とコスメ。二人だけの205号室。「実はねえ、コスメ。見せたいものがあるの」「ん？」「これ」着替えやら何やらいっぱい入った大きなバッグから大事そうに取り出した一枚の絵。「コンクールで入賞したの。」「これ、私じゃん！」キャッチャー姿のコスメが、そこには描かれていた。「入賞なんてスゴ～い」「まだあるよ」「MY BEST FRENND」と書かれたスケッチブックには、ホームランを打った姿、盗塁を刺した姿、涙を励ます姿・・・グラウンドで奮闘するあらゆるコスメが切り取られていた。「里帆！あんた、やっぱり親友だよ。ありがとう」「いや～あっ、そろそろ始まるんじゃない？」群青VS塔翔のセミファイナル。覚醒した海野、奮闘する涙。だが、コスメのいない群青は、エンジンオイルの切れた車の様にも

ろかった。4ー10。「涙さんが10失点。」「やっぱり群青はコスメがいないと…でも、コスメはプロへ行くんでしょ」「えっ？なんで分かるの？」「プロ志望届、いつ出したの？白状おし！」「言うから、そこ痛いから。ピカソさんに勝った翌日」決まり悪そうにコスメが告白する。「でも、見てよ今のこの姿。まさに五体不満足。こんな使い物にならない人間をどこのチームが欲しがると思う？育成でもあるかどうか」「あるよ！コスメ」「えっ？」「コスメを描いてて気が付いたんだ。コスメって凄く絵になるの。描く前から被写体事態。絵になる選手ってごく限られた本物のスターだと思う。甲子園のファンがあんなに夢中になるの、すごく分かる。それにコスメはまだまだ発展途上。伸びしろは限りなくある。全治1年としてそこから二軍で2年鍛えたとしても、まだ19才。こんな素晴らしい逸材、放っておくチームの方がいいよ！」「里帆」「あるよドラフト1位」それから2か月。10月25日。ドラフト会議当日。「ちーす。コスメ、具合はどう？」正午ピッタリに彼女たちは現れた。「ピカソさん、涙さん、神木くんまで」「私がお見舞いがてらに全員の指名を見届けようって誘ったの。ほら、『野球次郎』も買ってきたよ。『ドラフト大展望号』。」「こわ～い」「何言ってるの、今日の主役が。まあ、今回は『女子解禁&小中学生も年齢制限無し』の革新的ドラフトっていう事からすると、ウチら全員今日の主役だけだね。何々、神原ピカソ(Sランク=4～6球団競合)、江夏唯(Sランク=4～6球団競合)、夏木涙(Aランク=単独指名)、神木純平(Bランク=2～3位指名)、才原コスメ(Qランク)。「Qランクって？」「クエスチョン。1位競合もあるけど、指名漏れもある。だからその瞬間を一緒に味わってみたかったの」「悪趣味！」そして始まる。運命の一瞬…

「第一巡選択希望選手 横浜 神原ピカソ 18才 札幌名水高校」(来た！ピカソ)

「第一巡選択希望選手 オリックス 神原ピカソ」

「第一巡選択希望選手 阪神 江夏唯 18才 大成高」

「第一巡選択希望選手 ロッテ 江夏唯」(なんで今日、彼女誘わなかったの？)

「第一巡選択希望選手 中日 江夏唯」(苦手だから)

「第一巡選択希望選手 楽天 江夏唯」

「第一巡選択希望選手 広島 神原ピカソ」

「第一巡選択希望選手 西武 夏木涙 18才 群青高校」(先輩～)

「第一巡選択希望選手 ヤクルト 神原ピカソ」

「第一巡選択希望選手 ソフトバンク 神原ピカソ」

「第一巡選択希望選手 読売 江夏唯」

「ねえ。私なんて指名されなかったでしょ。大体、まだ歩くことも出来ない自分を…」

「第一巡選択希望選手 北海道日本ハム 才原コスメ 16才」「あ？」

若い頃のこと

佐野卓志

僕の20歳代の若い頃ですが、松前清流園で自分の車を使っての外出介護のボランティアをやっていました。その時に清流園にいて付き合いのあった車椅子の重度身体障害者のS君が、今は一人暮らしをしながら、ヘルパー派遣会社の社長をやっていて、最近うちに来るヘルパーさんから風の便りに聞きました。若い時に関わった重度の障害者が、社長さんになっているとは、嬉しい知らせです。

松前清流園は重度身体障害者の入所施設でしたが、僕がボランティアに行ったきっかけは、松前清流園から退所して、すでに市内立花町のアパートで一人暮らしをしていた水口英一さんの紹介です。その頃は施設にボランティアに入るのに、入所者の友人ということで入っていました。当時の入所者の友人の面会者たちには、施設は入所者を抑圧管理する敵であるという思いが強くあり、施設職員とはほとんど口も聞かなかったし入館者名簿に名前を書かなかつたりしたし、施設側も入所者がアパートに退所することを警戒して、緊張関係がありました。清流園の課長の重松さんだったと思うけれど、「水口さん関連の人たちは、職員と一切口をきかないけれども、佐野さんだけは口をききますね」と言って、彼も身の上話とかもすることがあって「若い頃セツルメント運動に関わっていた」とか言っていたので、彼も弱者に対する運動にシンパシーがあり、僕たちと似た部分があり、世代は巡るのだと感じました。

その水口さんは体が小さく、手と足はリウマチで萎えて、自力で車椅子をこぐこともできません。24時間誰かがそばにいて介護しないと、暮らしてはいけません。今ある支援費制度もヘルパーの制度などの行政施策は、まだ影も形もない頃です。施設からアパートへ入りたての頃は介護者が集まらなくて、友人の軽度障害者に1ヶ月間連続で介護に入ってもらったり、介護者がいなくておしっこを漏らしたりしたことも、あったようです。

水口さんの住んでいたのは、もちろん普通の賃貸アパートです。これを障害者用に、風呂の段差をなくしたり手すりをつけたりして、大々的な改装工事をしていました。生活保護なのですが、当時アパートのバリアフリー化などまだ前例がないことでした。行政交渉によって、公費で出せるようになり、後に続いた重度の人たちも、自分の住みやすいように、無料

でアパートの改装をしていました。

友人の男性の軽度障害者は重度障害者の女性のOさんとアパートで暮らしていましたが、のちに別れて別に暮らしていました。彼は自らCP(セブラルパルシー)だと言って、障害者という自覚がとても強い人でした。当時ビデオが新開発されて出てきて、六角堂の住職と親しい彼はAVのテープを貸してもらって、僕も随分見ました。彼のアパートに遊びに行くと、冷凍していた鶏肉をさっと解凍して、唐揚げを作ってくれ「まあ飲め飲め」とすすめてくれ、僕にはできないその手際の良さにはびっくりしました。彼は若いのに孤独死をしました。

水口君たちの介護者は、主に大学構内(当時は部外者の出入りが自由だった)で「ボランティア募集」のビラを配って、集めていました。水口さんの生活が徐々に軌道に乗るのを見ていた施設暮らしの重度の女性障害者たちも、市内のアパートを探し、生活保護費で改造して、施設から退所して次々に一人暮らしを始めて、介護者集めをし始めました。立花町に水口さんがいたので、その近くに住む人もいて自立障害者のメッカのようでした。水口さんのように、アパートで生活保護をもらいながら地域で暮らすことを、「施設生活」に対して「自立生活」といい、「自立障害者」と自ら名乗っていました。重度障害者の中で、男性は水口さん一人だったので、男の介護者はみんな水口さんのところに行ったので、女性たちと違って、介護者はたくさんいて、また介護者にとっても、良い居場所となっていました。焼肉パーティーをしょっちゅうやって介護者に振る舞い、あるいはAVのレンタルビデオを一緒に見たりして、貧乏な若者を元気づけていました。「僕には介護も何もできない」と言った病者の若者に「コーヒーを淹れてくれ」と水口さんは頼んでいました。とっさに役割を与えるこのコミュ力の高さが、水口さんの魅力でした。水口さんのアパートの居場所感覚はムゲンの目指した雰囲気と同じものでした。水口さんも生活保護ですから、それほど裕福なわけではありませんが、みんなと一緒に目一杯、できる贅沢をやったと思います。

水口さんは「リハビリ」を強く否定していたのですが、「自分が辛いリハビリを1年間続けて、ようやく指が一本動かせるようになったとしても、その間に、うまいものを食べて女子と付き合った方がよっぽどマシだ」と言っていました。高齢者が脳卒中後とかに行うリハビリなどと、青春真っ只中の障害者のリハビリとは、意味が全く違っていました。もっと基本的には、障害は欠損なので、多数派の健常な体に少しでも近づくためにリハビリをしなくてはいけない、という常識の否定でした。障害者はそのまま生きていい、環境の方を変えるべきだ、という多様な自己肯定が基本でした。

また行政の差別対応を解消するために、自立障害者仲間数人で「愛をむさぼる会」を組織して行政交渉や行政向けの学習会もやったりしていました。「ボランティアの愛は偽善だけれど、せっかく施してくれるなら、積極的に貪っていこう」というネーミングで、水口さん自身もとても気に入っている名前だと言っていました。市役所で原一男監督の「さようならCP」を上映したりしていましたが、見た市役所職員にとっては、理解不能な映画だったろうな、と思います。全国的な運動組織である全障連（全国障害者解放運動連絡会議）の代表幹事もつとめていましたが、介護者が、障害者を過激な運動に引回したりすることには「反対」していましたし、介護者に遠慮とかは全くなくて、言いたい放題でした。障害者が運動をしている間は、積極的に介護に入るけれども、運動をやめたら潮が引くようになくなってしまふ、過激派の運動家たちもいて、施設に戻らざるを得ない障害者もいました。

水口さんのアパートには本当に色々な人が訪ねてきましたが、ある時解放同盟の水田さんという議員さんが組合のラーメンを売りにきていました。2つ残っていて、一つは麺が折れてばらけていたので、綺麗な方を買いました。水田さんは「綺麗な方を取るのですね」と指摘したのですが、僕はそんな「得をしようとする側の人間だ」と見透かされてしまった気がして、とても恥ずかしかったことを、思い出します。今はその場で損をする方が、人間関係は結局うまく行くものだ。損してでも相手にサービスするのがコミュカの基本だと思っています。

水口さんの施設からの自立に刺激されて、自立をした重度障害者の一人にMちゃんという人がいました。介護で関わっていた、舞台の照明とかの仕事をしていたGさんと結婚をすることになりました。それに反対して立ち上がったのが、Mちゃんの身内でした。そこで水口さんは、当時介護で関わっていた元教師のおばあさんの樋口幹先生に「樋口先生出番です！」と声をかけて、Mちゃんの身内の説得に当たってくれて、やっと結婚への障害が取り除かれました。夫婦別姓の事実婚だったと思います。Mちゃんに女の子も生まれて、とてもたくさんの女性がローテーションを組んで介護に入っていました。Mちゃんも参観だとか積極的に学校の行事にも参加して、普通にお母さんをやっていました。娘さんも今では大人になって、働いていると聞きました。

樋口先生は水口さんや精神科医のMさんや他の人達のアパートでの暮らしをモデルに「蠅螂(とうろう)の斧」という小説を書いていて自費出版で出しました。樋口先生は被差別部落を描いた小説「橋のない川」の著者の住井すゑさんを尊敬していて、自費出版するに当たって、前書きを書い

て欲しくて、住井さんに小説を送って読んでもらったら「セックスシーンのある小説などはダメです」と言われ、泣く泣く「蠅螂の斧」の中のセックス描写を全部カットしました。重度障害者達のセックスシーンを官能的に描いていたのに、とつてももったいないことをしたなと思いました。樋口先生は「60歳前はまだガキです」だとか「女三界に家はない」などが口癖でした。伊予市に住んでいた自然農法の哲学者の福岡正信さんが樋口先生の親戚で、ある時食い詰めた福岡さんが樋口先生を訪ねてきて、「筆筈を家捜しした挙句に貯金通帳を持って行ってしまった」と言っていました。樋口先生とは数年前に川内町の老人施設に暮らしていて、ムゲンで作った着物リメイクの洋服を持っていったのが、最後になりました。

Mさんという精神科医は夫婦で昔過激派だったと聞きましたが、松山記念病院がまだ木造で松山精神病院(略して松精)だった頃に精神科医として赴任してきて、彼の進める病棟開放化の一環で、長期入院者の旅行を計画しました。医師といえば病院の最高権力者ですが、「病棟では婦長さんの力が強くて、大反対されてなかなか実現できなかったけれど、事故を心配してヒヤヒヤしながらも、みんなを旅行に連れて行くことができた」という話をしていました。のちにムゲンの会員にもなった西原さん達に呼びかけて。あがきの会という病者の運営するたこ焼き屋を、松精の近くに立ち上げたりしました。焼き手は、ボランティアがローテーションで入っていました。Mさんはモーターボートとかも持っていて、障害者のキャンプにも持ってきて、みんなを乗せたりしていました。体の大きな障害者を軽々と抱きかかえて、栈橋から船に、梯子を渡ってスムーズに乗せていて、「力あるなあ」と感心したのを覚えています。僕もモーターボートのハンドルを握らせてもらったことがあります。もちろん無免許ですが、車と違って、急ハンドルで海面を滑りまくりました。Mさんは、のちに障害者運動から完全に身を引いていきました。

僕は当時「死刑廃止運動」にも関わっていて、死刑囚や有期刑囚などに面会したり文通したりしていました。松山はその活動家の人数の多さから、公安も目をつけたようで、「ムゲンで販売するタバコをまとめ買いしてやる」と言って、最初から「自分は警察の人間である」と明かして近づいてきて、彼と定期的にタバコを買ってもらう時に会うようになりました。僕が交通事故を起こした時も、「力になってやる」と言われていました。ある時にスナックに誘われ、触れなば落ちん的なホステスさんを紹介されて、接待も受けました。スパイ化工作だとは気づいていたのですが、面倒見のいい公安に対して、僕は毅然とはねつけることができないでいて、水口さんに相談したら「俺が断ってやろうか」と言われたので、僕も決心がついて、

なんとか公安との付き合いを断つことができました。

当時は全国的に施設からでてアパート暮らしを始めた自立障害者の運動が広がっており、僕は障害者運動のメッカである大阪の箕面市にもよく行って、彼らの作業所にも泊めてもらい、自立障害者ともよく話しました。彼らに共通すると思われる性格が、正直で、しかも人の心の中にどんどんと入ってくる厚かましさです。僕が「作業を松山で立ち上げようと思っている」と作業所の車椅子の障害者と話していたら、「なんで車椅子を押して見学にこないんだ！」と罵倒されて面食らったのですが、次に会って「僕は精神で入院歴がある障害者です」と話したら「それはずるい。始めに言え！」と言われました。当時は「障害者自身が立ち上がること」が何より重視されましたし、この性格的な厚かましさがないと、介護者を使い続けることができないだろうと思いました。のちに大泉洋の主演で映画になった「こんな夜更けにバナナかよ」の本も読みましたが、「おなじ厚かましさだな」と思いましたし「それに応える介護者も同じだな」と思いました。

水口さんと知り合った当時には、水口さんがいつも正直になんでも言うことに感動して、友達を増やす秘訣だと、学びました。僕は話していても、自分の弱いところを突かれると、どうしても言葉に詰まって、黙ってしまうことも多かったのですが、この「瞬時の正直さ」を学んでからは、なんでも弱みをさらけ出すことが、話し上手になる上で大切なのだとわかりました。

当時の障害者運動で有名だったのが、赤堀闘争です。冤罪で死刑宣告を受けた精神病者の赤堀さんを救援する運動です。水口さんは「赤堀さんは性格がいいので、支援の輪がこれほど広がったんだ」と言っていました。水口さん自身もとても性格が良かったので、松山の運動業界の中心にいたのだと思います。当時の運動業界では「CPの人はいつも笑っているように見えるけれども、これは介護してもらわないと生きていけないために、健常者に媚びている気持ちの表れではないか！」などと批判されるような「嫌われてナンボ」という空気なのですが、その中で、水口さんは「やっぱり愛されるべき性格も運動には必要だよ」といっていたわけで、正しさよりも、本音を重視した人でした。ちなみにCPの人が常に笑っているように見えるのは、顔の筋肉の不随意運動らしいです。

「障害者自身が立ち上がる」という話題について、水口さんは「CP者の青い芝の会とかの会議では介護者は追い出して、障害者だけで話し合ってやり方を決めて行くけれども、僕はそこまで厳密にはやらないです」と言っていました。当時の介護者の間では、「障害者の言葉には逆らわない」と言うルールが共有されていました。障害者があくまで主体なのです。

琵琶湖のほとりで開催された全障連の大会にも行ったことがあります。松山からも車を出して、乗り合わせて行きました。全障連の会場では、パンクファッションに身を包んだ車椅子の人や、明らかにセクトの関係者だろうと思われた人も多かった気がします。会議の会場では、自分の発言が終わったら会場の外に出て一服してきて、また会場に戻って発言することを繰り返していた、重度の精神の当事者だろうと思われる人もいました。また会場に介護者なしでできている車椅子の人もいて、周りにどんどん「介護してほしい」と声をかけていて、僕も捕まって様々な用事を言われたのですが、きりがないので、「自分の介護がありますので」と言って、逃げだしたこともありました。当時は全障連の絶頂期だったと思いますが、今は運動で要求していた介護ヘルパーも法制化されて、障害者も努力しなくても介護者が得られるようになって、特に「自立」を主張しなくなった気がします。コミュカの低い障害者でも、ヘルパーでアパート生活ができるようになったのは、大きな運動の成果だと思います。制度も手厚い支援費制度がまずでき、自立支援法に変わって大幅に削減されて、今に至ります。健常者の介護保険との統合も検討されていますが、障害者団体は、全力で反対しています。介護の時間数が大きく減らされるからです。

水口さんの介護者で、大学でセクトの活動していたM君に誘われて、広島であった集会に誘われて、行ったことがあります。昼間の集会を終えて一泊したのですが、重度障害者のアパートで、夜の介護もやってくれという条件でした。「彼はゲイだよ」と聞いていたのですが、寝る段になってやはり誘われて、寄り添うように寝て、彼が手を伸ばしてきて、僕のちんちんをしごくのですが、緊張の入った握り方で、痛くて興奮どころでもなく、全く反応なくて、しばらく経つと寝てしまいました。基本的に介護は同性ですが、ゲイの場合は介護者探しがとても難しかったろうな、と思いました。

一度水口さんの故郷の久万町に行ったことがあります。随分な田舎にお母さんが一人で暮らしていました。今南海放送ラジオDJで活躍している障害者の小倉くめさんも同世代で、同じ久万町の出身で、お互い知っていたようですが、考え方の違いで、深い交流はなかったみたいです。

以前は大阪の箕面市で作業所職員で、今ゆめ風基金(障害者の災害支援NPOで被災地の障害者支援を専門に行い、ムゲンも愛媛支部になっている)の理事の八幡さんが、大阪の作業所の製品を持ってきて「これを四国で売ろう」と言ってきたので、水口さんと八幡さんと僕の車で、水口さんの知り合いの家を訪ねて回ったこともありました。伊方町では手製の手動エレベーターで、2階に行けるように改造してあった家もありました。ひたすら水口さんの人脈の広さに頼った、四国一周の旅でした。

八幡さんのいる大阪は自立障害者のメッカのようで、人数も多くて、「そよ風のように街に出よう」という自立障害者向けの季刊誌も出していました。駅のエレベーター設置要求運動も盛んで、次々に駅にエレベーターも設置されていきました。「そよ風」を出しているリボン社を訪ねて、青い芝の「母よ殺すな」(障害者運動のバイブル)を、愛媛で売ってくれと3冊くらい預かったのですが売れずに忘れていたのですが、2年くらい経ってきっちり請求書が来て払いましたが「大阪人はしっかりしているなあ」と思いました。のちに東大の上野教授の「産むかどうかは100%母の権利である」という主張に、障害者団体が「産みたいのは障害児も同じだ。障害を理由に産まないのは差別だ」と論争にもなりましたが、出生前診断で障害がわかった場合、90%の母親が堕ろしているのが現実で、障害児の生きる権利は、今では誰も言わなくなっています。

水口さんは愛むさの中の、軽度の女性障害者と付き合っていました、彼女がくると、男の介護者達はみんな追い出されて、アパートの前で所在無くウロウロしていました。もちろん彼女が帰れば、すぐに介護に入ります。水口さんは「自立障害者のカップルは、女性が重度障害者で、男性が健常者という場合がとっても多い。その逆はなかなかない。原因は男性の方が積極的に接近していく場合が多いからだろう」と言っていました。

水口さんは脳出血で若くして亡くなり、愛むさもなくなり、残された人たちがいくつかのグループに分かれて再出発しました。一番大きいと思われる施設がCIL(自立生活支援センター)です。新しいヘルパーの面接には、水口さんの親友であった山口県の自立障害者の人が当たっていて、風呂の介護とかを見て成否を決めるらしいです。本当に当時水口さんの周りは人材のカオスで、病者、学生、過激派、労組員、医療従事者、司法書士、その他様々な人材が出入りしていました。そしてその頃の介護の学生の中から、やがて行政に就職する人もいて、水口さんたちが目指していた政策を、ずっと後に出世してから、実現したりもしていますし、また新聞社に入って出世を果たした人もいます。このニュースの印刷をしてもらっている松栄印刷の森社長も昔はヒッピーで下が、水口人脈です。水口人脈は松山のリベラル系の人をつなぐ、幅広いネットワークになっていました。出入りする人があまりにも多くて、介護に運動側を探る公安警察も入り込んで、水口さんが「あの人は警察のスパイなので、情報を与えないように」と触れ回ったこともあります。ゴカイという市内の精神障害者の患者会からも介護に人が来ていました。

当時味酒心療内科の笠先生が、診療所の5階を開放して、ゴカイという患者会に提供していました。病院デイケアもまだ一箇所くらいしかない時

代に、個人病院でデイケア的なことを始めたのです。味酒心療内科の患者さんを中心にゴカイは大きくなり、近くの味酒町の泉市荘にアパートを借り、集まれる場所を作り、みんなでご飯を作って、共同生活のように暮らしていました。世話人として味酒心療内科のワーカーさんが来ていました。

そのころは宇都宮病院事件だとか、患者に対する虐待が明るみに出た後で、精神病院開放化が花盛りで、笠先生が開放化を進めた堀江病院では、病棟内でみんなで酒を飲んだという話も伝えられました。病棟にコーヒーマシンの自動販売機を置くときも看護師から、「患者さんがコーヒー中毒になる」と大反対が起きましたが、いざ設置してみると、一時的に爆発的に売れたのですが、すぐに沈静化したようです。年に一回の病院に地域の人との交流をする、堀江バザーも始められました。長期入院者の退院政策も進められました。ムゲンニュースでも以前に亡くなった是澤さんのことを書きましたが、この頃に「一人暮らしは無理ではないか」という意見を押し切って、退院してきた長期入院者の一人でした。日本の精神科の長期入院が国際的批判にさらされて、国が退院政策に予算をつけるようになるはるかに前のことでした。今でも退院政策が根付いているわけでもなく、退院を言う患者さんに「今はコロナだから」だとか「スタッフが忙しくて支援ができない」だとかいって、退院させない病院もまだまだ多いです。

さて当時退院した患者さんがリーダーになり、市内各地で次々に居場所として患者会ができていきました。松山市内でも竹の会、あがきの会、そしてムゲンもできました。今から40年近くも前のことです。その中でゴカイは、ピカイチ巨大で、聞いた話ですが、生活保護費を使って、住むためのビルまで建てたそうです。各地の医学会や家族会に抗議のカチコミ闘争もやっていました。家族会の集会とかに乗り込んで妨害するので、警察も出動したりしましたが、京都のエバッチによると「レクリエーションの一環だった」そうです。「天上天下病者反撃！」という本も出しました。中でも男女のFさんの二人はゴカイを引っ張っていたように見えてましたが、活動も目立っていたゴカイは、大阪の池田小事件をキッカケに巻き起こった、ネットでの病者に対する全国的な罵倒の嵐の集中攻撃で、男性のFさんは入院になり、ゴカイを辞めてしまったみたいです。女性のFさんは多少気難しくて、僕が話しに行っても、「ムゲンは行政援助を狙っている」とか、当時ムゲンは作業をしない作業所だったのですが「作業所は社会復帰路線だ」とか批判ばかりをするので、僕も距離を取っていました。ゴカイは「変な古本屋」という暇つぶしのような商売もしていたのですが、結局10年以上たってから、ムゲンと同時に行政援助をもらいました。ムゲンも一切の行政援

助なく、ずっとボランティア経営だったので、ルーテル教会の牧師さんや僕の父にも手伝ってもらって、ずっと行政交渉を続けていました。援助金の支給が決まった時には、世話役だった波津子さんに安定した給料が出せるようになり、とても嬉しかったです。当時は援助金に関する行政の内部の規定で、「バックに家族会だとか信用できる団体が付いていることが援助金を出せること」という条件があって、どこの馬の骨かわからない僕たちのオープンした作業所など、相手にはされませんでした。

当時の精神の運動の考え方として、「反精神医学(治療を否定して、環境さえ変えれば、普通に生活できる)」という考えでしたが、薬物治療の驚異的な発展とともに、精神科治療はすすみ、反精神医学は、減薬を進める方にシフトしていったようです。昔の抗精神病薬でぼうっとさせることが治療的だという主流の考えから、異端だった反精神医学は薬物拘束を解いていく減薬を進める方に進み、今では精神科治療のメインストリームになっています。笠先生も長く発達系の統合の人たちの減薬に取り組んでいて、「統合は存在しないのでは？」とまで言うようになりましたが、エバッチに「病棟にいて棺桶でしか退院できない人たちのことを忘れたのか！」と批判されたこと、歳も歳だし(笠先生は僕と同じ高校の出身で、僕が高一の時に、校門前で投稿してくる生徒に、よくビラ配りをしていました)、公的に発言しなくなったように思います。

さてゴカイは解散して、今では跡形もなくなっていますが、ムゲンも就労支援B型事業所となって、食事会は続けているものの、患者会というよりも就労支援に重心を置く場所になっています。居場所から就労支援になってから一番変わったことといえば、居場所の時にはメンバーは来たり来なかったりで、誰もこない日もありましたが、就労支援なら行けば必ず仕事があるので、メンバーは休まずに毎日来るようになりました。つまり集まるだけでは、居場所としては不足で、行けば何かしらの役割があり、することも必ずある、そしてお金もついてくる、ということで「居場所」になるのかなあ、と思います。作業所は、いくつかの決まりを受け入れることによって、総合福祉法の中で法的に位置付けられて、安定経営になりました。もちろん毀誉褒貶のある総合福祉法ではありますが、作業所運動や自立障害者の運動を政府が取り入れた、一つの成果であろうとも思います。

今京都で40年以上の歴史のある患者会の前進友の会のエバッチを中心に、全国の事業所や施設などの中で「患者会」を再建していこうという動きが始まっています。いくら制度が整えられても、基本患者同士のつながりが、孤立しないための、一丁目一番地だと思います。患者会というのは孤立していた統合失調症の人が中心でしたが、松山でも「できるだけ前

向きな当事者会」とかが、新しく集まりを持ち初めています。

あとがき

佐野卓志

9月末にきょうされんの大会が岩手の陸前高田であったので、1泊でメンバー2名と職員3名で行ってきました。テーマは「東日本大震災から11年」です。空路大阪で乗り継ぎ岩手花巻空港につきました。松山から3時間くらいかかりました。レンタカーを借り、空港近くの「宮沢賢治記念館」をみてから、高速を使い、奥州市で降りて州牛を堪能しました。大谷翔平のポスターがあり、奥州市の出身らしいです。そして一山超えて、大船渡温泉に着きました。漁師町で、夕食はこれでもかと、海の幸ご馳走です。サンマの塩焼きとブリの天ぷらに甘辛いタレをかけたものが特に美味かったです。愛媛で買うサンマとは違って、丸々太っていました。お刺身とか残したのがもったいなかったです。朝は露天風呂から、日の出も見られました。

大会会場は津波で壊滅した海岸端に立っており、広い道路と公的な建物が点々とできていました。道の駅に併設して、津波被害を展示してある施設もありました。総合交流センターに着くと、すでに300人くらいが来ていました。震災のシンポジウムがあり、以前の研修会で訪ねた南相馬市で救援に当たった青田由幸(サポートぴあ理事)さんがパネリストで出ていて、印象的なお話でした。当時救援の壁になったのが、行政の持つ障害者の名簿が個人情報という理由で公開されなかったことです。障害者の手帳取得者とか自立支援医療の利用者とかの情報ですが、青田さんたちの南相馬市では、「精神障害者の救援が行われないと、街は火の海ですよ!」と行政を脅して、名簿を公開させました。アパートローラーを行い、薬も切れてアパートに取り残されていた人を次々に救援していきました。福祉避難所も手続きが面倒で全く機能していなかったのですが、今では直接福祉避難所に行けば入れてくれるような仕組みに改善されたようです。普段から行政と連絡を取っていて、非常時には行政の情報公開ができるようにしておくのが大切だと言っていました。福島記憶も今ではもう忘れ去られて、甲状腺癌の手術をした人はいないことにされ、汚染水は処理水と言い換えられ、実害も全てが風評被害だと言われてしまっています。「原発震災、障害者は一消えた障害者」という青田由幸さんの本が出ていますので、興味のある人は、ぜひ読んでみてください。さて帰りは道の駅とかでお土産買ったりしながら、花巻空港につき、大阪便に乗りました。僕たちの前の席に座った女性が、日経新聞を赤ペンで線を引きなが

ら読んでいたのですが、眼鏡や横顔から「稲田朋美さん？」と思っていたのですが、降りるときに「稲田さんですか？」と聞いたらそうでした。「LGBT法案の時には僕も応援していたのですが、結局潰されましたね」と言ったのですが、稲田さんは無言のまま足早に降りていきました。イヤリングが真珠の串刺しのようで、「センスがイマイチかな」と思いました。防衛大臣の時には派手なドレスを批判されたりして、「空気を読まない人なのか」と思いました。突然LGBT法案を出してきたのも、空気を読まなかったのかもしれませんが。防衛大臣をやめた日報問題も、発達系は忖度ができないので「本当に知らなかったのか」と思いました。

きょうされんの研修も歳のせいで、遠くに行くのはもう体力的に、無理かなと思いました。家に帰ってきて、1日トロトロと寝ているし、膝の痛みはずっと治らず、屈むのが恐怖でサポーターをつけている毎日なのです。

ムゲンで募集している寄付も研修に行くメンバーの交通費などに使わせてもらっています。一口3000円で郵便振替01640-7-74936です。宛先はNPO法人ぴあです。協力できる方はお願いいたします。

最近のムゲンの作業は、行政の旅行支援なども始まったので、ホテルのアメニティーの内職が、山のようにきています。仕事については、手を抜かない(メンバーにとっては厳しい作業です)ので、発注先の山陽物産の評価はとてもいいので、どんどん仕事を回してくれるのです。

ムゲンのメンバーには元職人さんもいて包丁研ぎを1本300円でやっています。椅子や机を直したり、網戸を作ったりもしてもらっています。

最近ウクライナカラーのアームバンドを作って、高島屋のハートフルプラザに出品していますが、売り上げは全額ウクライナ支援に寄付しようと思っているのですが、身内が買っただけでほとんど売れてはいないです。

近所のルーテル松山教会は、月に1回の「みんなの食堂」を始めました。これは信者さんとか関係なく、誰もが行ける子ども食堂のようなものです。ちなみに、子供は無料で大人は200円で、予約なしで食べることができます。次のオープンは木曜日の4時から7時までですが、開催日はルーテル教会に確認した方が良いでしょう。ルーテル教会は「松山市木屋町4-3-2(代表やまぐち)です。」食事会で余った食材をムゲンにもおすそ分けもしてもらって、感謝です。

ムゲンはゆめ風の愛媛県支部です。ゆめ風とは、神戸の震災を機に大阪の障害者団体を中心に作られた、災害時の障害者救援のためのNPOです。理事の八幡さんが災害のあった現地にすぐに飛んで、障害者救援本部を立ち上げます。愛媛では数年前の西日本豪雨で、南予で一緒に活動しました。ゆめ風は民間の寄付金によって運営されており、寄付は「郵

便振替00980-7-40043 ゆめ風基金」です。来年度はゆめ風の総会を3月18日、19日に松山で開くのですが、すでにゆめ風松山の自立生活センター松山の面々が準備に動いてくれています。

僕も長生きするつもりですし、皆さんもコロナとインフルに気をつけて生活してください。



